

能に息づく記憶と文化

－『調律師 ショパンの能』をめぐる－

藤井カルポルク陽子

人々はどのように記憶と文化を受け継いでいるのだろうか。本発表では、日本の伝統芸能である「能」に着目し、この点を考察していく。

能は14世紀半ばに観阿弥(1333-1384)・世阿弥(1363?-)親子が当時の様々な芸能の要素を組み入れて大成し、現在まで受け継がれている芸能として、国内外で知られている。およそ650年もの間、能楽師が親から子へ、師から弟子へと受け継ぎ、現在まで絶えることなく続いてきた演劇としては世界にも類を見ず、2008年にはユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」にも登録された。

本発表では、人々の記憶と文化を多層的に伝える媒体として能を捉えたい。発表の前半では、この多層性を明らかにし、後半では、能が日本やアジアのみならず欧州の文化を取り上げた例として、ポーランドの首都ワルシャワで2011年に初演され、その後各地で上演された『調律師 ショパンの能』に焦点を当てたい。

まず、能が記憶と文化を伝える媒体だということはどういうことなのか。第一に、能を演じるためには基本的な立ち姿である「カマエ」や、足裏を床に擦る特徴的な移動方法である「ハコビ」をはじめ、様々な多くの「型」を学ぶ必要があり、その動き・所作の技術は、代々伝えられるものである。そこには長年の稽古や舞台における身体の記憶がある。また能は歌舞劇であるので、「型」を通じた身体の動きのみならず、謡いにも同様のことが言える。その舞や謡いの技術の中に、先人の記憶や表現の知恵が含みこまれている。それは、囃子方(能管、小鼓、大鼓、太鼓)や狂言方に伝わる技術についても同じように言える。

本発表ではその他に、能の中に14世紀半ば以前から存在していた芸能の痕跡が伝わっているという点や、作品が書かれた当時の古典文学の解釈の仕方が謡曲の中に見られるという点、また、装束の保存の仕方、着付け方、能面の扱い方、作り物の作り方など、舞台を支えるものの伝承という点も紹介し、能がいかに記憶と文化を多層的に受け継いでいるかを示していく。

さて、能が語る物語に目を向けた時、そこには日本の伝説や古典文学や和歌のみが現れるのではなく、中国等アジアから伝わった伝承や詩も作品中に散見される。また、近年では欧米でも新作能が書かれ、主題が西洋の文化に根ざしている能作品も確認できる。その一つの興味深い事例として、ポーランド人の作者ヤドヴィガ・ロドヴィチ=チェホフスカ氏によって書かれ、九世観世鍔之丞氏をはじめ優れた能楽師達によって演じられた『調律師 ショパンの能』を取り上げ、作品中に息づくポーランド文化の要素を紐解くことで、能が記憶と文化を多層的に受け継いでいるということ、また異なる文化を包含する柔軟性を持った芸能であるということを述べていきたい。